



福島原子力事故関連情報アーカイブ

Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	低線量放射線の健康影響に関する研究の現状と今後 -日本癌学会-
Alternative_Title	Present status and future of the studies on the health effects of low dose radiation: in the Japanese Cancer Association
Author(s)	今岡 達彦(量子科学技術研究開発機構) Imaoka, Tatsuhiko(National Institutes for Quantum and Radiological Science and Technology)
Citation	第 53 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集, p.167 53rd Annual Meeting on Radioisotope and Radiation Researches
Subject	セッション：パネル討論 1(4)
Text Version	Publisher
URL	http://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/106856
Right	© 2016 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第 53 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集」のデータであり、発表内容に変更がある場合があります。



低線量放射線の健康影響に関する研究の現状と今後 —日本癌学会—

Present status and future of the studies on the health effects of low dose radiation:
in the Japanese Cancer Association

量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所 放射線影響研究部 ○今岡 達彦
(IMAOKA, Tatsuhiko)

日本癌学会（以下、癌学会）は「癌研究の発達を図る」（同学会会則）ために昭和16年に設立された、近年の会員数約16,000名のビッグコミュニティであり、基礎から臨床まで幅広い領域のがん研究者が所属する。

がんのリスクは、低線量影響の中でも放射線防護上、特に重要である。そのため、癌学会の潜在能力が低線量影響の解明に果たしうる役割は大きい。実際、ICRP、UNSCEARといった放射線防護関連の学術組織が提示する低線量影響解明のための重要領域のいくつかは、まさに癌学会がカバーする範疇にある。

演者の私見であるが、癌学会において低線量や放射線発がんの生物学、疫学等をテーマとして活動している研究者の多くは、（演者自身も含め）放射線影響関連の学術コミュニティを主体に活動している研究者である。これは、放射線影響領域の研究者が、癌学会での活動を通して最新のがん研究の成果を取り入れ、これによって自身の領域の発展を図ろうとしていることの表れであると解釈できる。逆に言えば、癌学会は設立以来の「癌研究の発達」を放射線影響領域に波及させることによって、低線量影響研究の発展に寄与している。

今後も、低線量影響研究に関して癌学会に期待される役割は、共同研究や人材交流を介して、最新のがん研究の成果や研究手法を放射線影響分野に波及させることであろう。これを加速するためには、両領域のコラボレーションを促進する工夫（たとえば、がん領域の研究者が低線量影響研究に関わることで得をする仕組みを作ること等）が必要であると考える。

Department of Radiation Effects Research,
National Institute of Radiological Sciences,
National Institutes for Quantum and Radiological Science and Technology